

震災ボランティアの社会学的研究（2）

-参加者タイプによる分析-

○世戸 俊男（神戸YMCA）、山口 泰雄（神戸大学）、土肥 隆（神戸商科大学）、
高見 彰（関西女学院短期大学）

キーワード：阪神・淡路大震災、ボランティア、期待と満足、イメージ、参加者タイプ

1. はじめに

わが国において、「ボランティア」という言葉は一般的になってきているが、実際のボランティア活動は低調であり、総理府が1991年に実施した「長寿社会に関する世論調査」によると20歳以上60歳未満の者の現在のボランティア参加率はわずか5.6%である。また、若者のボランティア参加率も日本青少年研究所が実施した日・米・台湾の高校生の国際比較を見ると、アメリカの63.9%、台湾の5.8%に比べて4.3%と低率である（朝日新聞・朝刊1994年5月8日）。さらに、ボランティア活動参加者の参加動機も所属団体や職場などにおいて参加が期待され、その期待に応えないと何らかのマイナス評価を受けるという不安や心配が活動の契機になっている（内閣総理大臣官房広報室、1983年）、いわゆる「外発的動機」であることが多い。

しかし、阪神・淡路大震災のあと、阪神地区全体では、1995年1月からの3カ月で延べ117万人のボランティアの参加があり、被災地ではボランティア活動に対して、「若者がボランティアとしてよく働いた」「日本はボランティア活動の新しい時代に入った」「生きることは人とかわり合うことだと実感した」「ボランティア元年を迎えた」等々多くの社会的な注目を集めることとなった（高田裕之、1995）。このように震災を契機にボランティア活動に対する関心が高まる中、震災後のボランティア自身の参加動機や意識、および態度変容を明らかにし、ボランティア活動の活性化と組織化に向けての基礎資料を蓄積することは重要な課題である。そこで本研究では、以下の研究問題(research problems)を設定し、参加者の個人的属性（年齢、性別、職業）から参加者のタイプを中高生、大学生・専門学校生、社会人に分類し、それぞれのグループごとに分析をすすめることでその解明を試みた。

- 1) 「ボランティアはどのようなきっかけで参加したのか？」
- 2) 「ボランティアはどのような動機で参加したのか？」
- 3) 「日常生活においてボランティア活動や規範行動をどの程度行っているのか？」
- 4) 「ボランティアは何を期待して参加したのか？また、活動参加により期待は達成（満足）されたのか？」
- 5) 「参加者はボランティア活動に対して、どのようなイメージをもっていたのか？また、活動参加によりイメージはどのように変容したのか？」
- 6) 「ボランティアは何を感じ、考えたのか？」
- 7) 「参加者の属性（性別、職業）により、参加動機や期待及び満足には違いがあるのだろうか？」

2. 研究方法

1) 調査対象

本調査は、1995年2月26日から8月27日にかけて「阪神大震災復興協力キャンプ」（日本YMCA同盟主催）に参加したボランティア1,004名（男性38%、女性62%）を対象とした（回収有効票は1,002票）。阪神大震災復興協力キャンプ（以後、ワークキャンプと略す）は日本YMCA同盟が主催し、5泊6日（原則）の日程で阪神地区に滞在し、ボランティア活動を行ったものである。

2) 調査方法

調査の方法は、質問紙を用い集合法により実施し、研究目的を達成するために、事前事後調査法(pre-post survey)を適用した。すなわち、ワークキャンプ初日におけるオリエンテーション直後に質問紙の前半部である事前調査を記名で実施し、ワークキャンプ最終日の活動後に質問紙の後半部の事後調査を実施した。データ分析には単純集計、クロス分析および記述統計を

用い、参加者タイプによる違いを検証するためにカイ二乗検定とt検定を適用した。

3) 調査項目

研究問題を検証するために、内閣総理大臣官房広報室(1983)、全国社会福祉協議会(1990)、山口ら(1989)、長ヶ原ら(1991)の先行研究を参考にし、8要因群19項目〔1.属性 2.動機：参加のきっかけ、意志決定、参加形態、参加動機 3.ボランティア経験：日常の規範行動、ボランティア活動の頻度 4.ボランティア活動へのイメージ：活動イメージ、事後のイメージ 5.キャンプへの期待と満足：期待内容、期待した内容に関する達成 6.ボランティア活動の内容と満足度：活動内容、活動満足度(参加者との交流・地域のひととの交流・ワークキャンプの運営・ボランティア活動の内容・全体的な満足度) 7.継続意欲：ボランティア活動の継続意欲、キャンプの他者への勧め 8.キャンプの感想：キャンプの感想や意見〕から構成される質問紙を作成した。

3. 結果と考察

1) 参加者のタイプ

年代別にみると、10歳代(46%)と20歳代(41%)で約9割を占めている。また、30歳代、40歳代と年齢が高くなるにつれ参加者の割合は低くなっている。職業では学生(生徒)が76%と最も多く大半を占めるが、会社員、公務員、教員、主婦、各種専門職など職種は多岐にわたっている。今回のボランティア活動参加者は、学生、会社員といった10代、20代の若者が主力であった。

2) 参加の情報源

主婦が含まれる社会人女性は、新聞や雑誌が情報源となっている者が多いが、中高生、大学生・専門学校生は所属団体(学校・大学等)、社会人男性も所属団体(勤務先)から情報を得ている者が多い。ワークキャンプに関する情報源として、テレビ・ラジオ、広報紙などあげる者は、全ての年代できわめて少なかった。

3) 参加の意志決定

中高生の参加決定には、男女とも「自分一人で決めた」以外に「友人」「家族」が要因となっているのが特徴であり、学生は男女とも約半数の者が「自分一人で決めた」と答えており、「友人」も約3割を占めている。社会人は半数以上が「自分一人で決めた」と答えている。

4) ボランティア参加期間中の休暇の形態

ワークキャンプには、春・夏休みを利用した者が最も多い。授業の一部として参加した者が1~2割見られ、社会人ではボランティア休暇を利用しての参加も1割程度みられる。

5) 参加動機

参加動機では「他人事でない」「自分の勉強になる」「現状を見ておきたい」「お金以外で役に立ちたい」が各参加者タイプに共通している。特に社会人では、「新聞やテレビ報道をみて」というマスコミの影響が強い。

6) 日常生活における規範行動

中高生より大学生・専門学校生、さらにそれよりも社会人の方が、日常生活規範行動をより実践しており、年代が高くなるにしたがい規範が高くなる傾向が見られる。

7) ふだんのボランティア活動の実施頻度

「募金慈善活動」のボランティア経験者が若干みられたが、ほとんどの参加者が今回がボランティア初体験である。

8) ボランティア活動に対する期待と満足

① 中高生(表1)

ボランティア活動参加前の期待が高かった項目は、「困っている人の手助けをしたい」「ふだんでは得ることのできない体験をしたい」「被災地の現実を知りたい」「人間として成長したい」「被災地域の人たちとふれあいたい」「社会のために何か役立ちたい」「ボランティア活動の勉強をしたい」などであった。普段できないボランティア活動を通して、被災地域の手助け、被災地域の人々とのふれあいを通して人間的に成長することとともに、ボランティア活動の勉強をしたいと考えていることがわかる。

ワークキャンプを終えて、満足度の高かった項目は、「新しい人と出会った」「ふだんでは得られないことを体験した」「被災地の現実を知ることができた」「ボランティア活動の勉強ができた」「被災地域の人たちとふれあいができた」「何か新しく感動することを体験した」などであった。

最も反応率の高かったのは、「出会い」であり、参加者を含めたボランティアの人々、あるいは被災地域の様々な人々との出会いに対する満足度が特に高い。また、かつてない大震災後のボランティア活動であり、その活動のほとんどは日常生活において体験できるようなことではなく、普段できない体験に対する満足度も非常に高い。さらに、援助活動を通して現実を知り、それがボランティア活動の勉強になり、被災地域の人々とのふれあいを体験することで感動の体験をする事ができたという面での満足度が高い。

②大学生・専門学校生（表2）

ボランティア活動参加前の期待が高かった項目は、「手助け」「現実を知る」「成長」「普段できない体験」「ふれあい」「社会に役立つ」などであった。被災地域の人々への援助の気持ちや被災者とのふれあい、現実に立ち向かうことでの人間的な成長などに対する期待が高いことがわかる。大学生や専門学校生も、中高生同様の期待を示していると考えられる。

ワークキャンプを終えて、満足度の高かった項目は、「出会い」「普段できない体験」「現実を知る」「感動の体験」「ふれあい」「ボランティアの勉強」「長期的な援助の気持ち」「自分を見つめ直す」などであった。最も反応率の高かったのは、中高生同様に「出会い」であり、参加者を含めたボランティアの人々、あるいは被災地域の様々な人々との出会いに対する満足度が特に高い。また、非日常的な活動であるがゆえに普段できない体験に対する満足度も非常に高い。さらに、援助活動を通して現実を知り、感動の体験をし、被災地域の人々とのふれあいを体験することで、ボランティア活動の勉強になっていることがわかる。ワークキャンプを通じて、長期的な援助の気持ちを持つようになったことや、自分を見つめ直すことができたという満足度も高い。

③社会人（表3）

ボランティア活動参加前の期待が高かった項目は、「手助け」「現実を知る」「長期的な援助の気持ち」「社会に役立つ」「ふれあい」「成長」などであった。他の年代に比べて、長期的な援助の気持ちが高い反応率を示している。被災地域の人々への援助の気持ちやふれあい、現実に立ち向かうことでの人間的な成長などに対する期待は、他の年代とほとんど同様の傾向を示している。しかし、他の年代に比べると、ほとんどの項目で、社会人は他の年代よりも期待が低く、多くを期待しても、「現実そんなに甘くない」ということを認識しているのが社会人の特徴であるといえる。

ワークキャンプ後、満足度の高かった項目は、「出会い」「普段できない体験」「現実を知る」「感動の体験」「長期的な援助の気持ち」「ふれあい」「ボランティアの勉強」「自分を見つめ直す」などであった。これらの項目は、大学生や専門学校生と同じ項目であり、社会人も大学生らと同様の満足を得ていることがわかる。最も反応率の高かったのは、他の年代と同様に「出会い」であり、様々な人々との出会いに対する満足度が特に高い。また、普段できない体験に対する満足度も非常に高い。さらに、援助活動を通して現実を知り、感動の体験をし、被災地域の人々とのふれあいを体験することで、ボランティ

表1 参加前の期待と参加後の満足（中高生）

項目	参加前後		p
	参加前	参加後	
手助け	1.48	2.34 ***	
発見	2.25	2.38 N.S.	
感動の体験	2.00	1.71 ***	
能力・技術を生かす	2.99	2.88 N.S.	
出会い	2.01	1.22 ***	
社会に役立つ	1.89	2.34 ***	
自分を見つめ直す	2.44	2.15 ***	
仕事に役立つ	2.79	2.53 ***	
長期的な援助の気持ち	2.31	2.09 **	
普段できない体験	1.67	1.32 ***	
共感	2.07	2.24 *	
成長	1.83	2.18 ***	
現実を知る	1.72	1.49 ***	
ふれあい	1.86	1.69 **	
ボランティアの勉強	1.92	1.61 ***	
時間の有効利用	2.56	2.03 ***	
新しい技術や経験	2.44	2.18 **	

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

表2 参加前の期待と参加後の満足（大学生）

項目	参加前後		p
	参加前	参加後	
手助け	1.63	2.45 ***	
発見	2.51	2.65 *	
感動の体験	2.25	1.87 ***	
能力・技術を生かす	2.96	2.87 N.S.	
出会い	2.12	1.29 ***	
社会に役立つ	2.01	2.52 ***	
自分を見つめ直す	2.22	2.09 **	
仕事に役立つ	2.76	2.50 ***	
長期的な援助の気持ち	2.14	2.04 *	
普段できない体験	1.90	1.40 ***	
共感	2.17	2.40 ***	
成長	1.79	2.44 ***	
現実を知る	1.70	1.66 N.S.	
ふれあい	1.92	1.87 N.S.	
ボランティアの勉強	2.20	1.92 ***	
時間の有効利用	2.47	2.21 ***	
新しい技術や経験	2.47	2.31 **	

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

表3 参加前の期待と参加後の満足（社会人）

項目	参加前後		p
	参加前	参加後	
手助け	1.66	2.48 ***	
発見	2.87	2.67 *	
感動の体験	2.66	1.96 ***	
能力・技術を生かす	3.19	2.95 **	
出会い	2.41	1.40 ***	
社会に役立つ	1.95	2.59 ***	
自分を見つめ直す	2.41	2.06 ***	
仕事に役立つ	3.33	2.58 ***	
長期的な援助の気持ち	1.94	1.96 N.S.	
普段できない体験	2.18	1.52 ***	
共感	2.22	2.41 *	
成長	2.09	2.53 ***	
現実を知る	1.92	1.74 *	
ふれあい	2.08	1.96 N.S.	
ボランティアの勉強	2.47	2.03 ***	
時間の有効利用	2.58	2.30 ***	
新しい技術や経験	2.90	2.53 ***	

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

ア活動の勉強になっている。ワークキャンプを通じて、長期的な援助の気持ちを持つようになったことや、自分を見つめ直すことができたという満足度も高い。

9) ボランティア活動のイメージ変容

① 中学生 (表4)

参加前のボランティア活動のイメージは、「自発的な」「責任感のある」「積極的な」「感動がある」「信頼できる」「まじめな」「嬉しい」「本物の」などのイメージが強く、ほとんどの項目でそのイメージは肯定的である。

参加後のイメージを見ると、参加前に比べて肯定的になった項目は、「魅力的な」「本物の」「人気のある」「身近な」「日常的な」「明るい」「不安がない」「感動がある」「嬉しい」「創造的な」「自由な」「楽しい」の12項目である。

今回のワークキャンプによって、中学生はボランティア活動をより身近に感じ、日常的な活動として認識していることがわかる。このことは、ワークキャンプが中学生のボランティア活動に対する意識を高めたこと明確に示している。

② 大学生・専門学校生 (表5)

参加前のボランティア活動のイメージは、中学生と同様の傾向を示しており、そのイメージは肯定的である。参加前に比べて参加後に肯定的になった項目も中学生と全く同じである。ただ1項目、「自発的な」というイメージが若干弱まっているものの、他の項目に比べて最も肯定的である。

③ 社会人 (表6)

参加前のボランティア活動のイメージは、「自発的な」「積極的な」「責任感のある」「まじめな」「感動がある」「信頼できる」「魅力的な」「本物の」「嬉しい」などのイメージが強く、他の参加者タイプ同様にほとんどの項目でそのイメージは肯定的である。

参加後のイメージを見ると、参加前に比べて肯定的になった項目は、「魅力的な」「本物の」「人気のある」「身近な」「日常的な」「明るい」「感動がある」「嬉しい」「自由な」「楽しい」の10項目である。他の参加者タイプに比べると、より肯定的に変化したイメージの数は少ないが、イメージが明らかに否定的になっている項目は皆無で、参加前のイメージ判断が他の年代に比べると、的確であったことがうかがえる。

表4 参加前と参加後のボランティア活動のイメージ (中学生)

項目	参加前	参加後	p
自発的な	1.79	1.83	N.S.
魅力的な	2.69	2.35	***
本物の	2.47	2.23	**
人気のある	4.07	3.49	***
責任感のある	1.81	1.82	N.S.
身近な	3.24	2.42	***
日常的な	3.53	2.67	***
かっこいい	3.62	3.53	N.S.
明るい	3.10	2.60	***
まじめな	2.38	2.45	N.S.
信頼できる	2.35	2.25	N.S.
不安がある	3.77	4.11	***
感動がある	2.18	1.81	***
嬉しい	2.54	2.14	***
積極的な	1.87	1.77	N.S.
創造的な	3.11	2.68	***
自由な	3.34	2.82	***
楽しい	3.02	2.32	***

p<.01, *p<.001

表5 参加前と参加後のボランティア活動のイメージ (大学生)

項目	参加前	参加後	p
自発的な	1.72	1.84	*
魅力的な	2.60	2.42	**
本物の	2.80	2.61	**
人気のある	4.02	3.53	***
責任感のある	2.03	2.06	N.S.
身近な	3.29	2.59	***
日常的な	3.58	2.81	***
かっこいい	3.75	3.76	N.S.
明るい	3.13	2.76	***
まじめな	2.37	2.47	N.S.
信頼できる	2.60	2.59	N.S.
不安がある	3.69	3.88	*
感動がある	2.22	2.02	***
嬉しい	2.60	2.31	***
積極的な	1.90	1.93	N.S.
創造的な	2.83	2.60	***
自由な	3.26	2.90	***
楽しい	2.94	2.52	***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

表6 参加前と参加後のボランティア活動のイメージ (社会人)

項目	参加前	参加後	p
自発的な	1.69	1.80	N.S.
魅力的な	2.52	2.36	*
本物の	2.63	2.44	**
人気のある	3.85	3.42	***
責任感のある	2.07	2.10	N.S.
身近な	3.09	2.34	***
日常的な	3.31	2.51	***
かっこいい	3.76	3.80	N.S.
明るい	3.10	2.73	***
まじめな	2.23	2.30	N.S.
信頼できる	2.46	2.33	N.S.
不安がある	3.86	3.97	N.S.
感動がある	2.36	2.10	**
嬉しい	2.65	2.43	**
積極的な	1.98	2.00	N.S.
創造的な	2.73	2.62	N.S.
自由な	3.19	2.86	***
楽しい	2.93	2.58	***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

10) ワークキャンプに参加しての満足度

地域の人との交流では、大学生・専門学校生の30%、社会人男性25%、社会人女性21%が満足していないと答えており、活動内容の影響や被災地域への理解が十分でないことがうかがえる。ワークキャンプ全体の満足度は9割を超えており、参加者タイプによる差異はみられない。

11) ボランティア活動の継続意欲

ボランティア活動の継続意欲は、参加者タイプ(年代)にかかわらず非常に強く、8割以上が周囲の人への参加を勧めたいと感じている。